



103
毎

江

29
1891
稿原

特
4424
16

七
行

正書めりさるん。そのは
六月下旬より七月中旬へ掛りて、自今日校
地底探検記を博

明治四十年の夏秋冬

明治初年の敵討

江見水蔭

自己中心明治文壇史

海底に眠る

No

齋

104
~~104~~

江

春陽堂の支配人高見勝の発議で、文士の字田の登山の計畫をなす。これは併し、西園寺侯の文士招待の漏れぬ春陽堂関係の文士の録籍をなすのである。要するに一氣附けにい

為といふ事を、後々至つて高見が告白した。

その登山文士は屋塚繁水、登張竹風、及び自分之ぶとの三人が主で、それと各々の友人及び加はり（長井金風、織田東島、太田孝、及び高見勝等）八月四日に出発する事と定めた。

国民のころは、その登山記を寄稿せよと、

No.

齋 齋

文館より。日 赤松恒嶽を本郷書院より。日 寒

朝暖廟を春陽堂より出版する為で、三種共

に探検実記或は海軍冒険小説で、斯う益々純

文学界よりは遠ざかり行くので有つた。（まこと）

日 癡船の里號とていふのを七月四日より日 九

州日々へ送り始めに。後、嵩山堂より出版

七月二十二日は日 悪道路とていふ短編を

日 右陽に送つた。これは自分としては例の

散文詩的短編の変形とて、得意の作の一つ

で有つた。

A 10 20 書山 三回 齋堂 日記

No.

日 日本少
手記
日 探検世
日 探検世
日 探検世

105
自

江

千葉道雄（江東）が使者として来た。江東は
はげしいお詫言で有つた。

（富士登山の事は）金剛杖の春陽堂出版の

各自精細な記述し、この稿は界

晴又雨と、文藝俱樂部の寄

せ（九月十三日）一枚一円の原稿

料は漸く一円二十銭以上

十月、新築の家を造つた。

母方の叔父村上四郎（上京して自分の宅に

滞在。お叔父は明治末年、高野山林業を終り

A 1020 青い三河海産物集

親の敵を討つて有る。

高野の徳蔵、水更

著、妻とくで居た。その為に入獄して保釈

を自分の岡山の家で受け、幼年の

自分は社として素讀を教授されるので有つた。

赤穂藩執政村上真輔（このが自分の母の實

父——即ち自分の外祖父）それを勤王佐幕の

ドサクサ紛らふ、居る教養の種と

好黨暗殺し、有つた。其徳を村

上四郎、同姓五郎、同六郎の四人兄弟、水

谷嘉三郎（後、白田嘉則——自分とは従兄で

齋

No.

No.

106
~~自~~

江

ので有つん。

文部省内の史談會へ叔父の借りを行つた。

の日十月七日で、幹事の寺師といふ人其地へ

叔父は鎌々其真相を語つたので有つんが、以

度の内々鳴雪の夫端會後員の一人とて引くする

れ、~~人~~複雑な事件を、簡單に解釋して、獨斷

的鑑察を吐かせるが、自分是は困らした。

(此事件は後年解決して、村上直輔は勤王の始末足利

五位を賜はらした)

司務かゝるり船のとりふ冒險立志小説を

自分が

No

齋 齋

杉浦先生は自分を託し人(津田勉の二親族、
その赤木俊孝といふ助太刀が00けりて、
度好く本懐を達したの故有つんが、
つて、敵側の者を勤王と認め、
その噂が高きうんが、それは冠履顛倒で
ある。村上直輔こそは、京都の岩垣家と因
縁深く、勤王に於ては法しそ人後の落ちぬ。
その直輔を殺害し是る暴徒の輩も、万一
當り有るやうな聖代の恨事であるといふの
で、村上直輔は当時の事情を陳情の上さしち

A 10 20 善山 三國傳 齋 齋

明治四十年の

No

107

江

時事新報の連載する『~~...~~』の日は十月二十四日である。その後大柴三男と改題して博文館より出版

十一月二十二日日本郷土会、文藝協会の新劇講演会が開かれた。ハムレットの大振舞いで、土肥春曙のハムレットが好評であった。東儀鉄道、水口徹陽、佐々素影、久保田金徳などが出演した。自分は思案、柳浪、天竺と一樹が入った見物した。

十二月十六日の紅葉祭りは、故人作の恋

A 10 20 第三回 郷土会

の山賊と自分脚色として上演。栗崎秋衣、葛城文子、田村西智、高梨侑堂、岡鬼太郎、岡村栞紀、坂東の三津子。自分は前夜解説を口演した。(今年の総収入は二十四百三十八円八十銭)

人類学の花野地

明治四十一年の初春、初夏へ
太古遺跡探検は益々熱をこめてゐる。それ

齋

No.

No.

10月
6日

江

無しと終つたが、教壇が聖地と考へられた様
 氣分は、雨は受雨りた。
 田岡鎮雲、樋口匡象、澤田撫松などの関係
 してゐる。東亞新報の、木村街道といふ
 のを連載した。後、黒髪街道といふ題
 して春陽堂より出版。東京毎日紙の、
 といふのを送稿した。
 白河鯉沼の、株式会社中央文芸を
 経営して
 江明といふ雑誌を發行。その自分
 海蔵といふ書をした。

齋 齋

No.

ぶ就て一々記載するは、その稿の目的で無いの
 で書するが、中で最も記念すべき発掘が一つ
 有つた。それは本邦人類学の發祥地といつ
 て、好い大森貝塚の事だ。これは明治十二年
 二米人モールズが発見したので、其後は兒
 島惟謙翁の邸内に取入れられてゐる。他が
 は今の所、いふ事があるのでは有つた。
 それを杉村楚人翁の斡旋で、二條基弘(公
 爵)坪井正五郎(故理學博士)の~~水~~花等と
 発掘した。一月二十一日(但し、何等得たかは

A 10 20 書(二) 三國新編

No.

107
7月

江

れるので、実際古蹟が試みたいから、自分
 は五筆と成る号れといふので有る。
 発行は探検の方面ズと先ぶる、博
 文館では画報を以て月限世界
 を出す権成つるのが、押川春津が主筆で
 その冒險小説が大評判ぶる、それで村上は
 自分をその對立させ様と企てるが有る。
 (自分としては、自分の冒險小説を愛読して
 号れんといふ押川春津を向ふて、
 のは、大人氣無いと思ふ)

No. _____
 成功雜誌社
 後

三月、三崎の女後者一巻で、自分の水
 中の結婚(今古堂出版)を興行すといふ
 ので、包金として十四圓有りてある。漸く無断
 興行が無くなりけり。 (決て自分の請求しんのは
 四月八日、櫻咲く夜に雪が降りしと、丸
 日は一寸餘り積つる。四十何年目と人々
 云つてある。
 同十三日、成功雜誌社の社長村上(露
 伴門下)が来る。さうして同社発行の探検世
 界の博文館発行の冒險世界の壓倒さ

A 10 20
 青い三河原宮

No. _____
 成功雜誌社

11月

江

四八七
四五五

十月二十日、~~...~~月給は五十

円と... 歩

ふ... 四月十四日、花井お梅を書いた。右陽

入... 同講堂で、水産講習所の全生

五月九日、国民への、女書山を書き

直ちに出発を申しん

A 10 20 青山 三回 紙 紙 紙 紙

五月十七日、東京社の島田義三が訪ねて来

青本廣方と自分との他国侵略の事は全く之

鳥沼の一夜

明治四十一年の初夏

硯友社の旅行會を、相州鳥沼の東屋で開い

No. _____

齋

No. _____



鷗外東屋の祝女社

鷗外 東屋 祝女 社

かつん。秘密主義の彼の事ぶりを、その如何なる関係を有してゐるかの。執筆は、
 うらやましきかつん。又問うれば、其片鱗、
 床のすげで、無心で有つた。話のハズミ、
 十日、風の程山先づあり、小波、柳、
 舟、運る事は、傳と電車とで片断る向い、
 眉山の二人と自分とは、徒歩で砦上ヶ原を、
 山と自分とは、舟の思ひ出の深い片瀬の地、
 旧宅跡を見、舟の物よりぬと、

齋 齋

No. _____

A 10 20 海山 三田國太郎

誰と併し、らん、ふ事を氣まかせ、聴かす
 言ひ出さん。
 或る問題、おぼん、密に、眉山
 は、あんな、ふいん、ぢよ。
 谷、柳浪、し、結果を見、傳は、生きて
 打、眉山、桂舟、運る、小波、程山、風
 方、や、つ、る、久々で昔、馴染の
 の、女中頭、お茶、と、今は、を、帰、と、盛

No. _____

川
自
年

の女中頭お茶といふの、今はを帰ると盛
 ちみやつてゐるといふ。久々で昔馴染の
 打ち話を語り合つてゐる。録音のローマンスを
 聴いたのは時がある。
 恩来、眉山、桂舟、蓮石、小波、程山、風
 谷、柳浪といふ顔で、げ所は一泊した。
 日し、然つといふ結果を見る。僕は生きて
 はゐるが、ふいふ中よ。
 いく馬車話の中よ。
 或る問題、おのれは、密かといふ眉山
 と言ひ出さん。
 誰と併し、うん、お事を氣の毒であつた。

A 10 20 青い三河原流石

No.

5

かつん。秘密主義の彼の事だが、その何
 人とも何の關係を有してゐる。執筆は
 問はずといふ。又問うれば、其片鱗
 を知らず、彼では無い。有つた。話のハズミ
 然る、事有り氣は云つた。知れぬ。小波、柳
 二十四月、風谷、程山、蓮石、小波、柳

No.

無
二
無

恩来眉山の二人と自分とは、徒歩で砥上ヶ原を
 片瀬をわき、俣野場へ先鋒隊と合ふ。眉山
 山と自分とは、昔の思い出の深い片瀬の地を
 来て、旧交跡を見、志す。のは物足りぬと、

齋
齋

重車待合せの儘りの間を、三人は、大急ぎで洲鼻の
 方へ行つた。
 昔より進むのは沙地泥地。それは既に礎を
 留りか取壊さしてゐる、雑草は砂上に蔓延せ
 るのみ。
 二人は茫然とそ空地を立つた。この所
 の砥上ヶ原の眺望で、昔のそれとは異つ
 てる。殆んど村の子供達が皆知らぬ
 顔で有つた。
 但し、自分は神戸から帰こゝろから江の時
 で二度遊んでゐるが、その時家は未だ在つた
 それ程の變動を、おどろ眉山は
 酷く感動して。
 こんふな變二回却つて昔の思ひの
 出て来るいぬと、と云つた。何れに
 猶心算を耽るもの。
自分雑草の中より石電の破片を見つけた。
 おう、以電で留の米を炊いてあるんやよ。
 非常なその自分可懐のつた。けん
 と眉山は、それではいふ、何れ他は、彼

No.



重車待合せの儘りの間を、三人は、大急ぎで洲鼻の
 方へ行つた。
 昔より進むのは沙地泥地。それは既に礎を
 留りか取壊さしてゐる、雑草は砂上に蔓延せ
 るのみ。
 二人は茫然とそ空地を立つた。この所
 の砥上ヶ原の眺望で、昔のそれとは異つ
 てる。殆んど村の子供達が皆知らぬ
 顔で有つた。
 但し、自分は神戸から帰こゝろから江の時

No.

113 江
~~白~~

あかつん
置いてけ堀を食つた。
二人は時——強る自分な時位、イヤぶ
不愉快な、淋しさを感得した事は無いので有つ
れ。
大勢で賑やりの遊ぶ喜ぶる最後の宴を
二人切の取次さん、前の朝来の清金の
錦織堀と一緒、非常な人生の寂寞味と
て感傷した。後で他の者の話では、ドウセ
氣節の二人が、この島へ行くので

の懐疑論者、その能わぬが、以て方は捉め
て冷嘲で、唯孤上ヶ原の方を眺めて、考へて
んでる。
皆、待てるばかり。さう行くと、ちやぶ
いか。
自分は待てる位で、さういふ所は頼得る
つれ。然るに、待合せざる者の社中は一人も
影を見せぬ。
それでは鎌倉で待つてゐる。知りぬと、
来合せん電車を待てる。鎌倉驛の居

眉山

待つてゐる。仕様が無いと、その先
登しにゆく。

二人は汽車で神奈川まで来た。自分は此所の

電車に乗る方向が都合がよいので、落着い
車道の所で眉山と再會を約束し別れた。これ

が彼との永遠の別れだのがある。二人は此所

彼の死を告げる豫感を受取らうとした。唯、

唯、下車してゆく。眉山を一人は去る。は
他の者が牧師三人と去つた。その事情と

同様で有つた。いづくまでか。

大森も、同の事。少の事。

眉山自殺す
明治四十一年の夏の上

眉山自殺す

明治四十一年の夏の上

六月八日、品川天五祭の第二日、午後四時

過ぎ、猛拳大の雷が降つた。大龍巻を祭生

れへ各所を損傷を致す。

同十五日の正午頃、丸間石橋の二人名前で

電報が来た。見ると

二

115 江

カワカミキフビヤウシス
 自分は吃驚した。普通は危篤云々で有る
 筈。急病死す—それが川上だりや。直覚的
 2日書つたふつらと感電した。
 国民のへ日女船長を書き送つてみて、其
 日の組は海いり心、大意がで二十五回を走
 り書きして、直ちに牛込区天神町六十七の彼
 の宛へ行つた。
 宛はそれが秘めしふり、夫人の顔もまだ
 知りあかつかん。結婚を東京で佛教式。—来馬塚の
 知らぬか。

~~去園まで行くと、細川風谷が外出し掛つて
 いる。~~

トサシサト

No.

能く書てあつた。奥の山をみるよ。工
 ライ事をやつてまうらんでね。信はあつた
 可いよ。と云ふつて、信は—くびつて行つた。
 自分は夢中で團の旗をたてた。正の床
 の間の植を流して、右橋の案がキヨトシと—
 てるて。
 日書つたよ。うん、書ツちやツちんがと云

No.

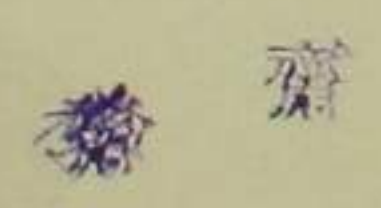
1020 青い 三河原 藤原
 新新聞
 中野
 内を
 受け

116
~~自~~

江

痛く何と無い。ハッとして間もなくんぢね
 死んで、眉山は気が善いて、こんふ事をす
 るんでは無かつた後悔してゐる事さうい
 本誌といつゝの氣紛れで、フラクと遣つれ
 んぢね。怒つた事さうい。
 桂舟一徹の獨断的判決——傷し不忠實さそ
 りが空相を貫く事のある——彼は何處もそれ
 を繰回へしてゐる。(今日でソレを主作してゐる)
 お園九華は熱病を並してせつとが、若く即
 瘡し切つてゐる。

No. _____



ひとつ、喉を指頭で示すのが有つん。
 それで初めと死の方法が自分の知らん。
 赤内桂舟が、その最期を遂げぬ書簡の出す
 て事だ。彼がスツカリ始末さつたのんとい
 ふ。
 見るの。と彼は甲走つた声で云つん。
 イヤ見さうい。僕は中々見る事さうい。
 自分は云つん。
 俺も見さういんぢ。と思索さ云つん。
 刃刀で遣つるんぢ。見事な遣つたよ。苦

A 10 20 書 三三三三三三三三三三

No. _____

117
~~自~~

谷町万隆寺(義兄末馬塚道)は当分同居する
 筈ふりて、其所は間敷が多く、閑静ふりて、先
 分著作が出来ると思ひつゝ、前夜は門生達と
 共々、家の別んの酒宴さへ開き、然るして何
 嘗も扶ふく露室に入つたとき、その夜半に
 獨り出て、書齋に入り、剃刀で腰を切斷
 して倒れたので有つた。
 夫人は驚いて所迄は行かぬ(南二十騎町?)
 細川風谷は告げぬ。風谷は病んで思案と九草
 とを告げぬので有つた。

齋

可何んがッて死んばんぢやう。死ぬらふ事
 は無いよ。我々友人は一言の相談もよく死ぬ
 ちんて、そんな法が有りませぬ。妻子は如何
 するんです。寧ろ無責任です。と云つて、眉
 山の代り自分をおりまがら、後を叩いてあれ。
 (遺書どううか、何等の一字も書き遣つて無い
 づれと云ふ。
 事情は例の秘密主義で、先月の鶴沼行の時
 は、^{一家}私等も一言の語をまかづ、眉
 山はけ日、天神町の家を引き拂つて、浅草区新

A 10 20 海山 三河屋敷区家

川
~~毎~~

江

最新報。
 三つおりの記者が一時の事を言っている。おの
 つれのいかに一人の後の事を言っている。おの
 十時過ぎまで自分は捕まうてくる。おの頭
 酒んて了つた。社中は神楽坂上の川筋へ一々
 〇〇〇で夕飯を嗜しおの相談会を開き、自
 分を待つておのの心があるが、籠り、馬への引
 揚が揃つておの。
 自分は焦げのく鍋を捲き返してヤツと晩飯
 を嗜して、帰電したのには十二時過ぎで有つた。

No.

齋

自分より先着者は廣津柳泡がある。門
 赤く梅漬の澤田程山とある。門生側では、
 山田旭南、岩田鳥山、^{平井湛山}其他がある。(茶地、曉汀
 〇〇〇が、自分は^赤馴染でおかつた。~~〇〇〇~~
~~〇〇〇~~
 柳泡と自分とで、風谷の宅へ行き、畧傳を
 草して引返した。自分が新聞記者係と成つて
 旗持さん。

二六、時事、東京日日、毎日電報、万朝報、
 やまと、東京毎日、中央、国民、朝日、東

A 10 20 齊 三 齋 齋 齋

No.

119 江自

有つん。酷烈に云へば無責任の死と云へる
有つん。決して我輩は眉山の死を饒るな
有つん。虚偽を云ふは用はふいふを云ふ
天才的文士の頭脳は到底普通人の考慮を以
て測定は不可能である。稍もその頭脳の
持ちたる文士——文士中の親友の一人たる自
分の判断を、見る角信用して書ふより他は
無いので有つん。
彼は上野坂町の時代の闇夜遊戯の松の枝を、
歴々と蜘蛛の巣の懸つてあるものを嘆息して
幻視ではふいふいと自分も疑ひをかう、紙片を

No. _____

齋

死因は？と各社一様質問されたを、そ
れは寧ろ當惑した。それは誰が誰を分る
ものかといふ。どうも分らぬが、人々の分る
ふかつんと云へるのを知れば、
すなは、眉山の平常 ~~推して見ると~~
他には無いのであるが、自分及び硯友記者
の判断は、夢幻の死といふのである。一死に
A 10 20 書山 三回 齋 齋

No. _____

死因は就て

明治四十一年の夏の中

120

120
~~好自~~

江

それゆゑ考へると、多少の煩悶（？）他（？）有つ
 るの知れぬが、その法として死を法する程の
 事件では無いと、彼は半衣不圖眼を説し
 る。刹那の判断に於て、死んで了へつとい
 ふ自己暗示する掛つて、フテ〜と死んだ
 との思へるが、これ（？）若し其時
 刺刀が目よ着いた、好い持て酒が有
 つた多、それを吞んで又寤るへ去つたか、知
 れぬいのが、桂舟の所請、死んで了へるが著
 いて失敗したと思つた程度、如何しよう

No

齋

シルシの附けを置いたが、翌朝見るとそれは
 ナヤと蜘蛛の巣の影を懸けてあるといふ。
 （日高某）
 これゆゑ、著者曰く、大正時代の七友が現れ、
 今度雑誌を發行するゆゑ、寄稿をせよと、
 依頼した、早速、
 起きると、バイロンの詩を翻譯して、又案ころ
 つた。明くる日起きて見て、机上の自分の譯文
 を見て、我ながら吃驚した。然るに、事有
 つた。
 これら類々の怪異的行動は彼等は未だく
 多量に有つた。社中では常々、眉山の事と
 一稀有なる男——と呼んでゐる位だ。
 三回三回三回

No

121
~~自由~~

江

のりして自分耐えぬと云つた。
 この日眉山の事だ。どの点も本心を
 云つた。如何の如くか。角は自由
 を要求する点に於て、極端に有つた。
 之へる超世間へ悪く云へば、人を知る者、その
 なるは香取山下の空録論と成つて、執業と衝突
 した。

記者團に向つては、これ程長くは説く間
 が無かつた。山イロの書中譯、蜘蛛の巣
 の例を挙げ、能く言ふ事、蜘蛛の巣の死と云ふ事、

No. _____

齋 齋

雨れふいの。
 但し、上野馬場時代と同居してゐる高瀬文
 満が、曾て自分言ふ事を云つてゐる。
 宇山眉山は困つた。救ひ様が無い
 か、知りたひ。極端に自由を要求してゐて
 自由の絶体は死だ、死を説き、若し
 死後、於て葬らるゝ。後土の堅白、墓
 石の堅白、耐え難き苦痛だと説いた。これ
 野原は放棄する。地無いと云つた。
 その骨、草木の根、縛り、縛り、縛り、

A 10 20 書 三 四 五 六 七 八 九 十

No. _____

1, 22
~~20~~ 自

江

位だ。

翌日の各新聞は競つて眉山の死を大々的の
 報道した。その中にも東京朝日、通信機を
 ケツツピリ出して、正しく編輯
 の手落ぶりが有つた。
 徳川玄吉編輯長で有つたので、
 成つて其失敗を取戻さうとして、
 西村喜次を
 解雇して、材料を集めた。それは
 名を調査して、月々の諸拂ひを
 作り、それを
 石臼として、眉山の死な
 難い事

No.

言いはりて有つた。
 国民の死は松崎云氏が来たので、
 自分は
 小銀を送つてある関係で、
 特等車の間入車
 に行き、九華柳氏、思素堂の
 紹介して、猶自分
 の知るだけの事を細説した。
 然るに、
 至り、云氏は自家の記者時代の
 思出を、
 論 其他を書いて、
 老獪ある江見の存
 一不喰は

A 10 20 善い 三三三

No.

一杯喰は

124
~~222~~

自分は直ちの羽下は絶文社を送り、海山を
とつて、西村は門下とつて、
之は、
とつて、

~~六月十六日、新聞小説を書いた後で、眉山~~

日月隈家親心親会

明治四十一年の夏秋冬

六月十六日、新聞小説を書いた後で、眉山
の申文を書く事と引渡つた。——文士誰
か、自らのを救うるよりぞ。筆の命をより漏る

りれども得は其当時、全然執筆しなかつた
のでりよく、
但案部は、
新小説は、
は、昔の恋の、
当時の文壇は、
下してはるす。行詰つたとして、
事は、有り様が思い、
生活難を説いた西村は、
右及海山、
これは、
A 10 20

江
125
~~自~~

聖十七日、駒込吉祥寺に埋葬。申文は思案
 の朗讀しん。紅葉の時、彼泣いて讀んが
 女も泣きあつた。坪内先生が卒倒したの
 で、今度自決して泣くふと皆で戒めたりを、感
 情家の御も無事な講了つん。
 同二十四日、国本田猪俣の死を聞いた。
 七月五日、眉山忌を是ヶ岡茶寮で開いた。
 餘興は堀野文録の長唄が編入されて多岐が
 寮には一切三絃を禁じてありしを、
 中止
 されん。

齋
齋

No

生血を流り出して——然るの意味で、彼の
 夢の死を説いた。それを持ち出して社中の見
 せて、字句一二の訂正は出たが、文士誰か自ら
 を殺さるるのぞ、云々は、皆當鑑して、守りた
 通説は、小波、思案、柳原、風谷の他は、
 近所ふりて、梶田半古、それより高瀬文閑、今
 古堂主膳川、春陽堂の高見孝（門下は勿論）
 曉云、風谷が、
 諸君曰、云保水漸傳の鹿嶋祭、平手酒造
 の一節を滔々と辯じた。
 友人の靈柩に向つて、身向の
 A 10 20 昔以 三回高瀬文閑

No

126
~~24~~ 自

(本年の總收入は二十四百円三十五銭)

雪中富士登山

明治四十二年の春 ~~夏秋冬~~

一月五日 探検世界社主催、自分が隊長と

成り、雪中富士登山の壮舉を成した。以

て事は、探検世界社(四十二年二月號)の巻

のりで書す。自分が右足の関節を痛めて

るために、後備隊と成り、一行の下山を三合目

十一月一日 読者社主催で、~~探検~~社が冒険

家の懇談会と成り、その間に、郡司成忠、

小島島水二人と共に、自分が招かれた。

同十五日 神田の錦輝館で、探検俱樂部主催の

探検諸君の会が成り、以月よりいよいよ自

分は、探検世界社の主筆と成る。

探検世界社と執業の事

半島の影を、お親の新年號と成り、

たり。福田日々に、猛烈(後、密着の人と

改題)一極口隆文館(探検)を寄稿する。

A 10 20 書 三 探検世界社

12%
~~25%~~ 白

まては出へんが、隊員中の豪傑横山勝右
郎が憤然として隊長たる者が登山せざるが
有る。と食つて樹の下で弱るさうな
イヤな理屈ッぱい若い辯護士だ。併し元氣
でドコか人より変つてゐると思つたが、其答
で有つた。

隊員中より西班牙人のコンサル、デ、ラ、
イスバタと云ふ外國語学校の教師や、瑞西人
のストユツゲル、ホツゲルと云ふ通信記者が
居てゐる。(赤んぼ) ~~今~~ ~~は~~ ~~名~~ ~~士~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~人~~ ~~は~~ ~~三~~ ~~有~~ ~~る~~

と成るさうな人々三有る


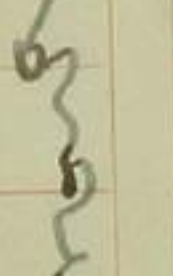
三月十三日は、東京大相撲協会の柱石たる
番権太夫(先代)が根岸は右衛門(先代)と
共々来れ。それは角力常設館完成より先、
年寄力士行司の三方を代表して、全国に
露文を、自分は是非執筆して貰ふといふ
ので有つた。

この披露文中は、抑々相撲は本朝の国
技あり云々、常陸山麓の下に、年寄の屋敷が
ヒントを得て、国技館 ~~説が有力と成り~~ ~~あり~~ ~~と~~ ~~す~~ ~~る~~ ~~が~~
陸山の口から、国技館とは見えんが、
名附け親

四月一日、妙ふ会。
 目黒行人場上の梅澤邸で
 開かれた。場所は古所高台で
 暮れに思ふ光景、活動的な
 内審とついで、柳原
 義光、小笠原長幹、
 中川敷、佐の三伯爵、
 和田垣謙三博士、東條
 銓、田村江東、押川
 春浪、佐藤紅緑、
 ともに自分加はりの
 で有つた。その時書
 の幼稚さは、今の見れば
 問題でないがある。

四月一日、妙ふ会。

と発表して、世当時の新聞、其事が
 載せられた。(切取扱)

六月十七日、上野新松亭で開かれた。国華侯
 繁邸の例會で、各美術家、の歴を 三十年前
 美術の講演、この日、往時の美術学校入学の落選者など
 六月二十四日、吉澤商會より、寺井小七郎が
 来て、 活動写真(映畫とは
 赤い云々の、 明治の五
 年の辺りを運んで行く。(映畫)を取った
 豆神のりがある)

A 10 20 香 (三) 昭和三年

No.


江
~~127 26 自~~

探検世界は不成即ち、自分の筆を
 断つて来た。(六月二十八日)

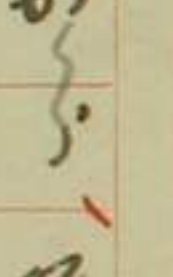
七月二十四日、現東京の旅館、山行が企てら
 れた。社会の多くは、酒落氣合、少時

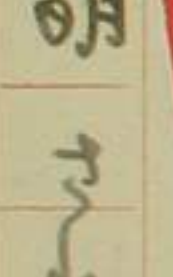
久我重石の、旅館江を、留めてきた。

すまじと地方通信の、国民の、上まつ葉

扱き、美、、一人

いけ、、江

見、、自分

け、、証明、
 後、今は故人だから

齋

江
27日

れ。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

す。そのを十月二十五日、
草浪の第一回

A 10 20 青い三河原流況

天狗傳樂部二十二——十一
点の差で大勝した。

（このが学生相撲の歴史と成る）
この時、一

学生として、江見部を
加つて一青年、そのが

今日の井上白揚で有る。
八月十九日の福留日

明日は、
明日は、明日は、明日は、

130
~~球自~~

つね(本年の総収入二千二百六十三円七十
銭—去年より減少—)

12月
亡父の光栄

明治四十三年の春夏秋冬

明治は後三ヶ年ある。併し、要するに純
文藝界の益は益々少く、新聞小説家、冒險小
説家、或は劇作家としての活躍は、その失
敗が多いので、その餘りな一稿も長く成

を書き出した。(後、今古堂から出版)

東京朝日入社小説を
ふ事、空中の人を、(後、日高有倫堂)一回三円五十銭
の、(大正時)新聞小説、毎日三社の分を
書いた。書き留めの場合、六回分がレコードで有
る。

十二月二十七日、藤澤に二回が来て、車御
座で川上一郎、佐々藤三を加へ、オセロを
初春興行とせしめ、五十円運賃
行へ。午前の脚本が五十円、下つたので有

A 10 20 善心 三回 藤澤 興行

131
~~毎日~~

リ過ぎぬの概要を記す。留める。

一月三十日、^{国技館}ヤマト新聞の主催で、学生
相撲大会第一回が行われた。江見館をめぐらば、

井上白楊以下三人の選手を送り、^{高橋園}百餘

名。裏が天狗俱樂部の大村市郎の横暴のたふ

危く血の雨を降らさる。

四月二十一日、^{上の}角力で、^{新田}田本を折った。

二六日、^{牡丹}牡丹花を寄稿。このが大盛り

で、後の活動も描り、又博文館の単行本

とあり、^{直破}直破で山長一破の芝居もした。

素より通俗物では有つたが、自分とて、^{A 10 20}得意作の二ツ
で有る。

七月二十四、五両日、相撲門下十餘名で天

幕旅行。馬込村で山賊と誤認されて、村民の向

面を受け、警官の取調べを受けた。

八月二十三日、^{水産}水産業者の博文館での

発行された。これは自分の傑作のミミを伝へた

もの。女房持し。新潮未曲。旅行者。林間の高塔。湖心の折。湖心の折。

東京朝日、^{水田}水田のあか、^{後の}後の水夫と

あか、^{十月十七日}十月十七日の連載、^{海軍}海軍

白瀬中尉の南探検を、^{探検}探検力を倒

した小説で有つた。東京朝日では同

海軍の探検
悪道
花弁が梅

No. 齋

132
~~子~~ 自

江

三百七十三円八十銭)

女優劇の脚本

明治四十四年の春夏秋冬

福留日日 八日 天津乙女 (後の旅行の女)

と路の今古堂出版) 中央 八日 大中の女

(日高有倫堂出版) その他少年新聞日誌す。

松竹の大谷竹次郎の使者で、賀古残雪の事

水晶の家) を脚本としてくれと依頼

隊の後援をしてくれ、社
では困る、梅吉有

十一月十五日、久々、故郷岡山へ帰った。

これは陸軍大佐で、明治天皇臨幸、縣下の

故人の功贈位、有る、亡父銳馬勤王の故

に、正五位を賜はる、~~やの~~内報を接し、有る

2人、(1) 行の事を、~~行の~~備前岡山

多(2) 書いれ、~~本報~~と題して

京城の報に、本報(後の)人との

岡山堂より出版) を送った。(本年總収入二千)

A 10 20 書 三回 雑誌 掲載

No. _____

No. _____

江

133

~~133~~

十月に入ると、
何時か「黒光」を
寄稿する事（成）
に。（後、嵩山堂出版）

九月二十一日、伊坂梅雪、右田寅彦が来て、
帝国劇場女優劇第一回の脚本を頼める。それ
で旧作「畫師室は問者」を迎はす事、約束し
た。月給百円と約束を打ちぬ。
東朝の「高麗界」を送り出したのは六月
初旬。
六月十六日、伊坂梅雪、右田寅彦が来て、
帝国劇場女優劇第一回の脚本を頼める。それ
で旧作「畫師室は問者」を迎はす事、約束し
た。月給百円と約束を打ちぬ。
東朝の「高麗界」を送り出したのは六月
初旬。
六月十六日、伊坂梅雪、右田寅彦が来て、
帝国劇場女優劇第一回の脚本を頼める。それ
で旧作「畫師室は問者」を迎はす事、約束し
た。月給百円と約束を打ちぬ。
東朝の「高麗界」を送り出したのは六月
初旬。

A 10 20 青い三四番紙用紙

No.

齋

齋

No.

134
22

江

載す。事は成る。
 素より脱線といふ語は有つたけれど、それは
 は汽車電車等の脱線で、人間常道の脱線とい
 ふ意味では、本が誰か借用したか。少くも
 文章の上で於て、それを自分は初め脱線的
 人物の上で書かされたが、自分では滑
 稽小説の新紀元を作すもの位は自信を得
 意である。(山路愛山や岡島不軒は自分より直
 白に愛語を愛するものも、さういふ事か、
 社では大不評で、中々立つて居る川が酷く羨望

齋

十月の、中央の
 日鏡と鈕とを連載
 し出した。(後、真山堂出版)

讀をいふ。これは幸四郎改名興行の一書目と

出で史劇二巻帯の有る。

東京の毎日、(後、白雲堂の日本社出版)を

新開小説三種と成る。(本年誌)

収入三千八百三十二円二十五銭)

脱線の元組

明治四十五年一の春の初冬

二月の、東朝の、脱線

A 10 20 書心 三河屋洋行

No.

135
~~子自~~

四月十九日、
すゝめい、
幻花を便し、中止を命じられた

上り客員を日取消された

こんふ、酔い目、遭つた事は、今までの無しの

で有つた、(脱線)の結核は、後の大正七、八、九、と

て、二六、二車載して、奇りな好評を、
その上、篇を九十九書房から出版

しん)

四月二十二日、時事、の、黒光、の、
然ら、
梅幸、宗十郎、宗之助、幸四郎等、
五月一日、
五月一日

然ら、
梅幸、宗十郎、宗之助、幸四郎等、
五月一日、

五月一日、

五月一日、

二初日、
この作
角力は相寄らず、体量は十四貫代、
し、
胃
腸を慢性の病、元氣よく、禁酒、冷水浴、
ど、
七月二十日、
明治天皇は不豫と洩けり、
然、
相撲を中止した
鳴呼、明治は、
明治十五年七月三十日、
これ、
自分で自分の、
大正年間、
作家として、
大園田と

角力は相寄らず、体量は十四貫代、
し、

腸を慢性の病、元氣よく、禁酒、冷水浴、

ど、

七月二十日、

然、

相撲を中止した

鳴呼、明治は、

明治十五年七月三十日、

これ、

自分で自分の、

大正年間、

作家として、

大園田と

136
~~抄~~

江

千種を ^{実大略し} 整理する。(高本文氏著) 読明治
 小説戯曲大観のうは大方書偏がある。け
 んごの後世に傳はるものは ^{その多くは} 一掃 ^{され} 有るもの
~~である。~~
 この明治文壇史のうはは永遠に
~~貴る。~~
 諸君は ^{この} 陽の好意に感謝し、又讀者
 諸君より厚く謝意を申上げ。

~~高本文氏~~

読者

No.

何時しか ^{いつか} 映画製作
 家として杉浦先生の司馬横田永之助の好
 意の下は日 ^の 顧問として ^{あつた} 彼の
 成功しなかつた。 ^{また他の種々の小説を書き現在では講演家}
 素く失敗である。 ^{また自分の文壇の歴史は}
 世間の突入と、自然界への道進とは於て
 丸い角今日まで ^露 命を ^{あつ} 示いで ^{あつた} 事と ^{あつた}
 事は、自分で之の ^{あつた} 性質 ^{あつた} 格者 ^{あつた}
 思ふのである。 ^{偶然の所得のゆゑに}
 其著作小説及び脚本 ^{長短} 二

A 10 20 書(1) 三回 藤野野矢

映画
 講演
 小説
 脚本
 長短

No.

4



A 10 20 青山三阿屋紙房製

No.

